

第 61 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展作家選考について

今回の日本館の作家は、国際交流基金から委嘱された 6 名からなる国際展事業委員会が、国内外 26 名の推薦委員から推薦された作家リストをもとに開催した会議によって選考された。前々回、前回と同じく、選考に当たっての基本的な方針は、1 作家、もしくは継続的に活動している 1 コレクティブであること、日本の現代美術を代表するにふさわしい作家であり、ある程度の国際的な経験があることが望ましい、日本国籍を有する、あるいは現在または過去に日本を拠点とする十分な活動実績がある、というものである。

選考会議は方針と方法についての打ち合わせの後、2 回にわたって開催されたが、1 回目では事前に目を通しておいた候補者の資料と推薦者のコメントを踏まえて各委員が一わたり意見を述べてから、作家ごとに相互討議を重ね、最終的には投票によって 7 名を次の会議に諮る候補者として残すことになった。各候補者には国際交流基金から参加の可能性の確認と基本的な展示プランの作成をお願いすることとしたが、展示プランについては前回のようなコンセプト・ペーパーだけではなく、展示についてのビジュアルな資料をも添えてもらうことになった。

2 回目の選定会議は提出された 6 名のプラン（1 名は他の展覧会準備と重なったため辞退。また他の 1 名はプランでは 2 名連記のユニットになっている）について各委員が個別の評価を述べた後、相互比較も含めたより多角的な視野での討議を行った。パフォーマンスや映像を主要な要素としたプランと日本館の空間的な条件とのかかわりについて意見が交わされた後、投票に移り、一位になった荒川ナッシュ医を選定することに決定した。

荒川ナッシュは 1977 年福島県いわき市に生まれ、1998 年に渡米、ニューヨークを経てロサンゼルスを拠点に活動している作家で、現在は米国籍を取得している。パフォーマンスを中心にしたインスタレーションで知られ、近年はテート・モダン（ロンドン、2021 年）や国立新美術館（東京、2024 年）などで個展を開催している。他の参加各国でも、多文化主義的な背景を有する作家やマイノリティの作家を取り上げることが多くなってきている。委員会としても、日系で外国籍を有するクィア・パフォーマンス作家を紹介することにより、日本の多様性をヴェネチアという場で育成できればと願っている。荒川ナッシュのプランのタイトルは《乳児たち、ナショナリズムにひたむきにイヤイヤ！》（現段階での仮題）というもので、作家自身の双子の子供と数多くの乳児人形などが会期中に“出演”し、観客をも参加させる大規模なインスタレーションになる予定である。LGBTQ やジャパニーズ・ディアスポラにかかわる問題を捉える、この作家ならではの鋭くもまたユーモラスな批評性に期待したい。

建畠 哲